

口蹄疫を振り返って ～喉もと過ぎれば～

西原 登 (株ファームテック)

All about SWINE 44, 38-40

口蹄疫・・・とこの言葉を聞いただけで、嘔吐・寒気・会社の存続云々を感じざるをえないのは私だけであろうか？否、畜産関係者全員の共通の想いであろう。忘れもしない平成22年4月20日、発生地宮崎県北部。思わず地図を見ると、会社から直線で約80km、道路ならば約120km・・・。前回の平成12年の発生よりも遠いこと、さらに一気に殺処分してすぐに終息するであろうと思った。しかし甘かった。その後毎日発生の報告が続き、終息の希望すら見出せない状況となり、なんと4月28日には約100km飛び越えて、わが社農場が所在するえびの市へ飛び火してきた。

後でわかったことだが4月20日以前に罹患した牛をえびの市へ運んでいた。つまり移動禁止措置の前であったことが災いしたものである。振り返れば3月に宮崎県北部で牛の異常があり届けたものの、口蹄疫とは判断されずまた動衛研に検体を送らず様子を見たことで、認定される1ヶ月の間に付近に蔓延し、致命傷となったものである。その後日々拡大、とどまることなく被害が拡大南進していったのは、関係者ならばマスコミを通じてご存知であろう。これを食い止めるには移動禁止の全域までワクチン接種によってウイルスの拡散を止めるしかない・・・という手段しかなかった。

このように口蹄疫発生から移動制限区域解除まで99日もかかってしまったものである。具体的数字を再確認すると、殺処分牛豚頭数28万8300頭、内訳として牛が6万8266頭、豚が22万34頭である。被害都市は、5市6町で全ての牛豚処分は5町、残りは約半分あるいは1～4戸である。発生農場数は292戸、ワクチン接種農場数1,011戸、防疫にかかわった延べ人数15万人、ピーク時車両消毒ポイント348ヶ所、イベントの中止・延期284件、被害総額は畜産関係約1,000億円、関連産業900億円とも言われた。一方、集まった被害義援金は約36億円であった。

ここまでの情報は殆どの人がある程度知っていることであり、インターネットでも知りうることである。しかしながら、筆者の在住するえびの市へ飛び火したことで、どのようなことがあったか・・・時効と判断し述べたい。半径10kmは移動禁止状態にあり、身動きできない状況の中でSPF農場を抱えていて何をすべきかあるいは何をしたか？本当のことを語る時期でもあろう。

4月28日にとうとう悪魔がやってきた。SPF農場とはどういう防疫をとるべきか？常識の範囲内ではあるものの、まず消毒薬を変えた。口蹄疫のウイルスには通常の(中性)消毒薬の効果はないことから、強酸か強アルカリでなければなら

ない。よって農場では消毒薬はビルコン、場内の進入道路は石灰、さらにエリア内の法面や豚舎間には希釈酢を来る日も来る日も散布した。さらに対策本部（えびの市役所）の近くに居住している社員、発生農場より2km以内の居住社員を無期限出勤停止、農場入り口より1.5km手前の空き地で入場社員の車を消毒し、さらに入場時に再度消毒し、さらに配送係りが農場周辺の公道まで毎日消毒した（これによって舗装の色が変色した）。

このように考えられる全てのことはやったつもりであるが、それでも毎日が不安・恐怖との戦いであった。えびの市内の1例目から数日して2例目が5月の連休中に発生、さらにすぐ隣の養豚場にも発生したことから、私はいてもたってもいられず対策本部のあるえびの市役所に乗り込み、対応策を伺った。しかし、我々SPF豚農場関係者との防疫意識の乖離が大きく、愕然としたものである。

役所は全畜産農家に石灰と消毒薬を配布したと言う。これに対して私は考えが生ぬるいと迫った。このような緊急事態になすべきことは、毎日消毒したかしないかの検証が重要である。これまで消毒すらしたこともない畜産農家もあるはずで、しかも動噴機すら持っていない人が多いのではないか？薬も倉庫にいたままでないのか？法定伝染病に罹患しても国が補償してくれる・・・といった甘い考えがあるのではないか？行政側も発生農場でも毎日消毒していないなら補償しないといった強い態度が必要ではないか？さらに、あらゆる道路で徹底して全車両消毒すべし、各道路は散水車に消毒液を入れ散水すべし、発生地区に木酢を空中散布すべし（作物には害はないはず）と提言した。口蹄疫発生はとにかく緊急事態であ

り、ウイルスとの戦争である。畜産農家だけでなく、ありとあらゆる地域経済に影響することから消毒を徹底すべきだと思う。その証拠に、レストランや飲み屋は閑古鳥が鳴き、旅館は殆どがキャンセルとなった。

上記の如く、生産者がやるべきこと、さらに行政がやるべきことをお互いが徹底することで拡散を防ぐことができるものである。その証拠にえびの市では4例発生したが、その後皆無となった。まさに行政・JA・市民はじめ、皆がひとつの方向を向いて一致協力して立ち向かった勝利であった。加えて良い意味での「えびの方式」という言葉さえ出たぐらい徹底した防疫対策が行われた。対策本部も私の申し入れを殆ど聞いてくれた。木酢の空中散布の実施については正直まさかと思ったが、農薬散布用ヘリコプター2機で使って行われた。

忘れもしない5月19日に山田農水副大臣(当時)がえびの市へやってきた。目的は口蹄疫ワクチンの接種要請である。しかしながら、えびの市は最終発生から7日間発生がなかったことで、猶予をいただいた。今振り返れば、あの時にワクチンを接種しなかったことで現在がある。まさに薄氷の思いであった。3年後の平成25年5月に山田前農水大臣にお会いした時にワクチン接種の猶予をいただいたお礼を申し上げたことは言うまでも無い。この時は参議院選挙前で、後日選挙ポスターが60枚送られてきたのには参った。

このように官民一体となり、それぞれが役割を果たせばなんとかなるものであることの教訓であろう。しかしながら、県全体が解除となって宮崎北部に行ってみたが、蔓延したのはさもありなん・・・と感じたものである。大きな河川が二つ

も横断しており口蹄疫の南下を食い止めるには最適と思われたが、車両の消毒がどこで徹底して行われたのかわからなかった。町中も石灰散布の跡すら殆ど見当たらない。えびの市はありとあらゆる所に石灰散布しており、橋の袂は両側ともマット消毒があったことを思えば、何と違いがあるものだろうかと思われた。また燃え盛っている中で特例で牛を移動し、知事と農水が喧嘩ばかり、またマスコミはお涙頂戴の記事ばかりではなかなか終息できない。いみじくも今年の参議院選挙に口蹄疫発生当時の都城市長が出馬し、その演説会で述べたことが面白かった。都城市で1例発生した時にえびの市長へ対策を聞いたなら、県の言うことを聞くな・・・ということがアドバイスであった。陽性確認ができたのは夜であったが、その日夜通しで殺処分、埋却を行って防疫措置を翌日には終らせた。えびの市も陽性確認から2日以内に飼料・糞など残材まで全て処分したことは言うまでもない。

あの悪夢から3年8ヶ月が経過した。昨日のよ

うなことでもあり、またはるか昔であったような気分でもある。我が農場においては今でもビルコンと一般の消毒薬で足の踏み込みと手洗いの消毒を継続している。これはささやかな抵抗か教訓か。

今年は年末を迎え、PEDが沖縄県・茨城県で発生し、しばらくしたら鹿児島県・宮崎県でも発生している。今のところワクチンが不足しているようでどこまで蔓延するのか・・・。まな板の鯉ながら、ただやるべきこと（農場防疫）をただただ徹底するのみであると考えている。口蹄疫なら国の補償があるが、届出伝染病にはない。考えようによっては後者の方が金額的な被害は大きいかもしれない。

我々畜産業界は、環境側面・TPP問題・疾病対策・生産物価格対策など、あらゆる問題において格闘の日々である。このように危険さと同居している今日、益々己に対して厳しくあらねばならないと徒然なるままに思うこの頃である。